

学科・資格 国文学科・教授

申請者氏名 梶川 信行

研究課題		『万葉集』の研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>昨年度に引き続き、研究の柱は次の2つであった。</p> <p>1つは、『万葉集』に登場する渡来系氏族の人たちの動向と、彼らが奈良時代の歌文化の形成に果たした役割について。とりわけ、百済系の渡来氏族を中心に、きちんと検証することが課題である。ここ10年余り、そうした課題に取り組んで来たが、今年度も引き続きその問題について調査を続け、そのノートの充実を図った。</p> <p>もう1つは、国語の教科書で教材とされている万葉歌について。少子化の中、教科書の販売部数が減っていることが大きな原因であろうが、経費をかけずに編集した結果、古典領域の教材の検討がないがしろにされている。何の改訂もせず、古いデータをそのまま流用している教科書も見られ、『万葉集』に関しては古い常識が温存された状態で放置されている。知識注入型の学習から課題解説型の学習への転換が求められている中、現行の教科書にはどんな問題があり、今後それをどう改めるべきか、その点について論文などの形で提言することを行なった。</p>
	研究の結果	<p>高等学校「国語」の教科書の『万葉集』に関しては、求められて2本の論文を公表した。『古典文学の常識を疑う』には、現行の教科書の『万葉集』に関する教材の問題点を整理したものを書いたが、『季刊文科』には、もう少し視野を広げ、高等学校の古典教育全体の問題を論じた。これはさらに、ブックレットになって公刊される予定である。</p> <p>渡来系の人たちの動きに関しては、大宰府周辺の百済系の人々が『万葉集』にどのように関与したかということ論じた。今年度公表したのは1本だけだったが、継続的にフィールドワークと注釈の形で調査を進めている。</p> <p>その一方で、『万葉集』と同時代の作品である『古事記』に関する注釈も進めている。これについては、『古事記』を専門とする助手の鈴木雅裕氏と共同で、上巻に関する注釈を3本公表した。『語文』に年3回のペースで注釈を掲載して行く予定だが、2年後くらいには、それを研究書として公刊するつもりである。</p>
	研究の考察・反省	<p>「国語」の教科書の『万葉集』に関しては、教科書の歴史の問題、個々の教材の扱い方の問題など、さまざまな角度から論じてはいるが、まだ体系化されるに至っていない。今後は、体系化に向けて、一つ一つの問題を整理して行きたいと思う。</p> <p>一方、渡来系氏族の問題については、注釈作業はほぼ終わったものの、個々の問題を論文として整理することについては、まだ十分ではない。今後も継続的に論文かして行きたい。</p> <p>さらに、上代文学全体に対する視野を広げるために、地道に『古事記』の注釈を進めて行くつもりである。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>『万葉集』の渡来系氏族——大宰府周辺の百済系の人々——</p> <p>『史聚』(史聚会) 52号 平成31年4月</p> <p>教室で読む古事記神話(三)——還降改言から還坐之時六嶋まで——(鈴木雅裕と共著)</p> <p>『語文』(日本大学国文学会) 164輯 令和元年6月</p> <p>誰のための古典教育か——文法中心の授業はもう終わりにしよう</p> <p>『季刊文科』(鳥影社) 78号 令和元年7月</p>	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>国語教科書で『万葉集』がどこまでわかるのか</p> <p>『古典文学の常識を疑うⅡ』(勉誠出版刊) 令和元年9月</p> <p>教室で読む古事記神話(四)——生国竟更生神から遂神避坐也まで——(鈴木雅裕と共著)</p> <p>『語文』(日本大学国文学会) 165輯 令和元年12月</p> <p>創られる〈聖地〉——日向三代の陵墓をめぐる——</p> <p>『史聚』(史聚会) 53号 令和2年3月</p> <p>教室で読む古事記神話(五)——匍匐御枕方から殺迦具土神まで——(鈴木雅裕と共著)</p> <p>『語文』(日本大学国文学会) 166輯 令和2年3月</p>	